



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 62 回 日本語教育方法研究会

於 愛知大学名古屋キャンパス

2024 年 3 月 3 日 (日)

第 62 回研究会を愛知大学名古屋キャンパスにおいて開催いたします。

会長 松崎寛

TABLE 1 第 62 回研究会 開催概要

日 時 :	2024 年 3 月 3 日 (日)
会 場 :	愛知大学名古屋キャンパス 講義棟
開催委員 :	高村めぐみ (愛知大学) 内藤真理子 (事務局: 電気通信大学)、畠山理恵 (同左: 文化学園大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付 ポスターセッション 1 のポ スター貼り付け	13:25	口頭発表
10:00	全体会 ー開会の挨拶 ー進めかたの説明 ー口頭発表	14:05	ポスターセッション 2 開始
10:45	ポスターセッション 1 開始	15:20	ポスターセッション 2 終了 ポスターセッション 3 のポスター 貼り付け
12:00	ポスターセッション 1 終了 ポスターセッション 2 のポ スター貼り付け	15:30	ポスターセッション 3 開始
12:15	昼食	16:45	ポスターセッション 3 終了
		16:55	全体会 ー講評 ーJLEM 賞発表 ー次回研究会の説明 ー全員で後片付け

目次

【参加方法】	3
【会場案内】	3
【昼食について】	4
【昼食交流会】	4
【プログラム】	5
【午前の部】	5
●口頭発表（2件）	5
●ポスターセッション1（上記2件を含む全26件）	5
【午後の部】	11
●口頭発表（2件）	11
●ポスターセッション2（上記を含む22件）	11
●ポスターセッション3（22件）	16
【凡人社による出張販売】	23
【会費納入のお願い】	23

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にお越しください。参加費は会員が無料、非会員が1000円です（現金払いのみ）。

なお、年会費のお支払いは会場で受け付けられません。23 ページ【会費納入のお願い】でのご案内に沿ってお済ませください。ご協力をお願いいたします。

【会場案内】

愛知大学 名古屋キャンパス ^{こうぎょう}講義棟

〒453-8777 愛知県名古屋市 ^{なかむらくひらいけちょう}中村区平池町 4-60-6

最寄駅：JR/^{きんてつ}近鉄/^{めいてつ}名鉄 名古屋駅、あおなみ線ささしまライブ駅、近鉄名古屋線 ^{こめの}米野駅



・名古屋駅からの場合、近鉄名古屋駅の「ナナちゃん人形」が目印になります。（地図矢印参照）

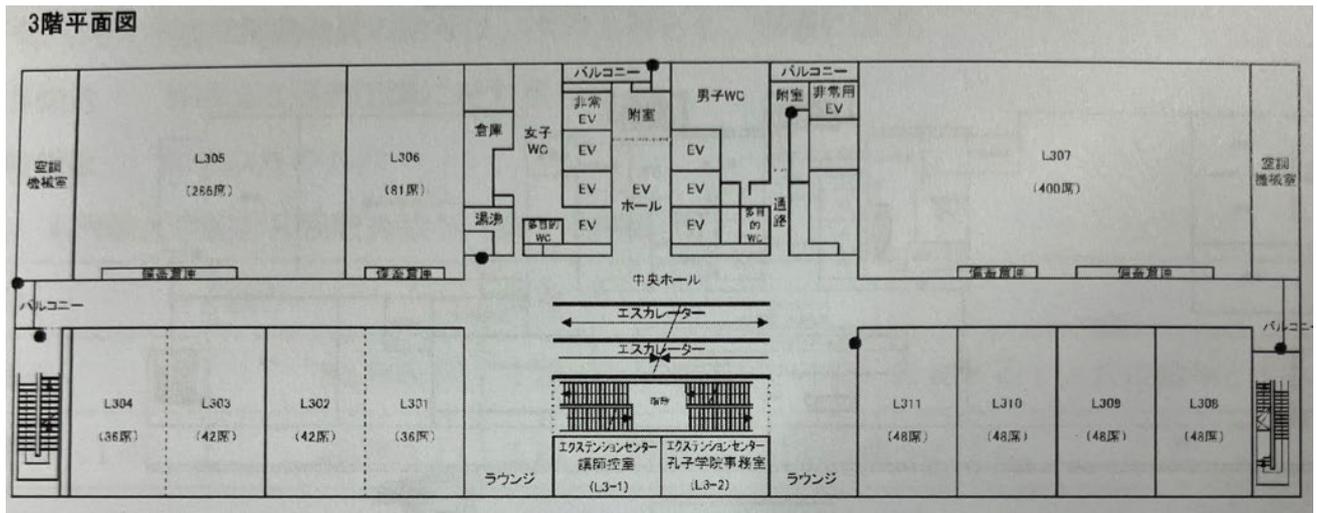
・ささしまライブ駅とは歩行者デッキ（通路）で接続され、講義棟2階入口に至りますが、研究会開催日（日曜日）は閉鎖されているのでご注意ください（1階よりお入りください）。

・会場は講義棟の3階です。1階よりお入りください。

愛知大学ホームページ 交通アクセス

名古屋キャンパスより引用

<https://www.aichi-u.ac.jp/guide/access#b-407288>



【昼食について】

持参されるか、近隣の飲食店・コンビニエンスストアなどをご利用ください。研究会開催日に学内の食堂は営業していません。

【昼食交流会】

それぞれ持参したお昼を食べながら、お好きなトピックのもとに集まって交流してみませんか。トピックは、教師養成・教師研修、地域の日本語教育、作文、会話、読解、等を予定しています。詳細は研究会当日にお伝えします。

【プログラム】

発表課題の前の番号は、ポスターセッションごとの番号で、カッコ内は全体の通し番号です。例えば「S2-22(48)」は、ポスターセッション2の中での発表番号は22で、全体での通し番号は48という意味です。研究会誌には、通し番号の順に掲載されます。

【午前の部】

●口頭発表（2件）

S1-01(1).パラグラフ構造と引用機能を可視化した文章指導の試みーモデル作文を活用してー

ボイクマン総子・トンプソン美恵子・根本愛子（東京大学）

学習者にとって各パラグラフの構成と役割を考えつつ、文章全体を通してそれらを論理的に結びつけて書くことは容易いことではない。加えて、論の組み立てで重要な役割を担う引用をパラグラフの中で引用でない箇所と区分して明示することは至難の業である。

パラグラフ・ライティングの先行研究では直接・間接引用の方法の説明はあるが、引用の機能については言及がなく、引用の先行研究ではパラグラフとの関係の説明はない。

そこで、本研究では引用をしながらいかにパラグラフを書くか、各パラグラフを連結させてどう論を展開させるかというパラグラフにおける引用の位置付けを作文全体で解説し、それを視覚的に提示するという教育実践を紹介する。

S1-02(2).外国人介護職員と日本語教師養成課程大学生の共修活動ー活動後のそれぞれの気づきに着目してー

田鎖楠奈（東北大学大学院生）・島崎薫（東北大学）

本稿では外国人介護職員と日本語教師養成課程大学生による共修活動について報告する。本活動は大学生が外国人介護職員へ日々の業務についてインタビューしその内容を基にリーフレットを作成するもので、外国人介護職員の社会参加、大学生の外国人介護職員の理解の促進、介護に関する議論等を目的に行われた。本活動を通じて、外国人介護職員は自身の仕事を日本語で表現したことが自信となった。また大学生は介護へのネガティブなイメージが好転したり、外国人介護職員のイメージが新たに構築されたりした。日本で働く外国人と日本人との対話機会は相互理解を進めるだけでなく、同地域に暮らす生活者として、社会問題と共にどう向き合っていくか考える機会にもなり得ることが示唆された。

●ポスターセッション1（上記2件を含む全26件）

S1-03(3).日本語教師に求められるジェンダーの視点

加藤恵梨（愛知教育大学）

本研究では、日本語学習者のキャリア支援を行うためにも、日本語教師にジェンダーに関する視点や知識が必要であることを主張する。日本語学習者はジェンダーギャップの大きい日本社会と自国との事情の違いに戸惑う可能性が高いため、キャリア教育を行う際、ジェンダーの視点に立った教育が求められる。また、職業の従事者数に男女の偏りがみられる教科書にであっても、ジェンダー・ステレオタイプが影響している可能性が高いことを日本語教師が問題意識としてもっていれば、教科書の記述と現実の日本社会は異なっていることを指摘することができる。

S1-04(4).Google Classroom「演習セット」を用いた漢字指導の試みー学習の効率化と教師の負担軽減を目指してー

宮口徹也（岡山理科大学）

コロナ禍を契機として近年では日本語教育でも ICT の活用が多く見られるようになったが、漢字指導については書字という性質上、学生が紙に書いたものを教師が添削するといった従来のやり方が今も主流ではないかと思われる。そうした中、2023年7月から Google Classroom の新機能「演習セット」が日本版でも公開され、これにより手書き入力での問題の解答が可能になった。筆者はこれを漢字指導にも応用できないかと考え、23年度後期から早速授業に導入してみることにした。本機能を漢字練習に取り入れたところ、学習者の反応は概ね肯定的で、遠隔指導への応用も期待できた一方、運用面では動作の遅さや正誤判定の精度、印刷への非対応などいくつかの問題が見られた。

S1-05(5).文章理解における mediation としての母語使用 —韓国語を母語とする中級学習者の事例から—
佐藤淳子（北海道大学大学院生）

昨今、第二言語習得における mediation としての母語使用の評価が見直されてきている。本研究では、テキスト読解の過程で行うキーワード等のメモに母語使用を積極的に認める実践を試み、処理過程での母語の使用が内容の伝達にどのような影響を与えているのかを探索的に調べた。調査対象としたのは、中級クラスで日本語を学んでいる韓国語を母語とする2名の学生である。再話活動を取り入れた読解授業において、学生は読解素材を一定時間読んだ後に内容をメモし、そのメモを見ながら読解素材の内容を再話することを求められた。メモで使用された言語（母語、日本語、ミックス）と、再話時の内容の再生率の関係を調べた結果、メモ言語と再生率には有意な相関は見られなかった。

S1-06(6).初級クラスにおける留学生とボランティアの協働活動のための作文教材開発
久保一美（日本大学）

本稿は、大学の交換留学を主流とする日本語講座プログラムの初級前半クラスにおいて、留学生と日本人ボランティア学生の協働的な活動を促進するために行った作文教材の開発についての報告である。本プログラムでは、日本語総合クラスの一環としてボランティア日本人学生が定期的にクラスに参加している。学期後の評価では、両者からの高い授業評価を得る一方で、参加者のさらなる主体的な参加を促すこと、また、コロナ禍で途絶えた日本語講座コミュニティが果たしていた役割を授業内で補完する必要性が求められていた。本稿では両者間の対等性に注目し、教材を通してその実現を目指しこの課題を解決しようとするものである。

S1-07(7).アルバイトとサークルでの経験から得た留学生 U の学び—待遇コミュニケーションの観点から—
徳間晴美（明治学院大学）

本研究は、日本語の授業外に目を向け、留学生 U がアルバイトとサークルでの経験からどのような学びを得たかを明らかにした事例研究である。インタビュー調査データを待遇コミュニケーションの観点から質的に分析したところ、【A】友達スタイルへの移行に関する微妙な判断と個人差、【B】年齢をめぐる困惑および相手の認識を示されることによる安心感、【C】他者の言動や話し方の観察と自己学習の重要性、【D】場面の中で直に学び、自分のものにする必要性、が見られた。自分を取り巻く人間関係や場を主体的に捉え、コミュニケーションを実践するに至る姿と、その過程で得られた学びを捉えた。

S1-08(8).学生への進路の意識づけと連携 —予備教育型日本語教育機関としての取り組み—
久野かおる・波村慎太郎・津坂朋宏（東京福祉大学）

東京福祉大学留学生日本語別科は新規入国の留学生を受け入れる予備教育型の日本語教育機関である。しかし、エスカレーター式で本科（学部）に進学できるわけではない。よって日本語力の向上を学習目標とする一方で当別科修了後の進路指導を行う必要があり、入学直後のオリエンテーション時から進路指導を始め

ている。新入生は夢と希望を持って来日するが、非漢字圏の学生が JLPT の N2 レベルを求める大学・専門学校に進学するのは困難である。本稿では、当別科の進路指導につき、「作文」「読解」「日本事情」科目で行っている学生への意識づけ、他の専門学校および系列の専門学校進路指導室との連携について効果と課題を報告する。

S1-09(9).応用認知言語学の観点からの類義語教材作成の試み —「まちまち」「さまざま」「それぞれ」「いろいろ」を対象として—

栗木久美（名古屋大学）・安藤郁美（東海日本語ネットワーク）

本研究では、「まちまち」「さまざま」「それぞれ」「いろいろ」を分析対象語とし、応用認知言語学の観点から類義語の理解をサポートする教材の作成を試みた。教材は、応用認知言語学の考えを援用し、多くの具体的な用例に接することによるボトムアップ的な習得と、語の持つイメージを図としてトップダウン的に示すものを組み合わせた。まず、辞書の記述と用例から四語の意味の共通点と相違点を明らかにした。そのうえで、教材では、学習者自身が語の意味特徴を捉えられるよう四語それぞれに複数の用例を示し、さらにその特徴をイメージ図で確認できるようなシートを作成した。

S1-10(10).工学系大学院生を対象とした初級日本語プレゼンテーション教育

松野美海・金銀珠（名古屋工業大学）

本稿では、工学系大学院生の日本語初級学習者に対する日本語プレゼンテーション指導の方法を紹介し、その効果と課題について論じた。プレゼンテーションの時に見られる主要な問題点の改善のために実施した指導法について、スクリプトと音声の二つの面に分けて論じた。特に研究紹介に関して、受講生が研究室で見聞きする語彙を知り、就職活動を含めた大学院生活で活用できる表現を学ぶ点で、初級の通常の授業と比べて特徴的であり、さらに中級以降にも応用できるものと考えられる。課題としては、スクリプト作成・音声面の修正に関し、受講生間あるいは自身でより気づける仕掛けを加える必要があることを指摘した。

S1-11(11).日中接触場面の雑談におけるナラティブの開始—連鎖組織の観点から—

夏雨佳（東京外国語大学大学院生）

本研究では、日中接触場面の雑談におけるナラティブの開始に焦点をあて、語り手と聞き手の発話からなる連鎖組織の特徴を明らかにすることを試みた。分析の結果、ナラティブの開始には、第一発話と第二発話から成る「基本パターン」の連鎖と、連鎖が拡張される「拡張パターン」の連鎖が見られた。そして、学習者と母語話者が開始したものを比較した結果、学習者が語り手として自分の経験を共有しようとする積極的な姿勢が見られたが、聞き手として第一発話で母語話者のナラティブを開始させたり、母語話者のナラティブの開始に対して、第二発話で多様に反応したりする行動があまり見られないことが分かった。

S1-12(12).年齢の多様性を理解する活動の試案—プロジェクト学習における教室活動を事例に—

吉井雄樹（関西学院大学大学院生）

本稿では、無意識的に伝え合っている「年齢らしさ」を疑問視し、「年齢」による縛りからの解放とそのステレオタイプを減らすことを目指した。そのために、プロジェクト学習に年齢の多様性を理解する活動を取り入れた。これにより、日常生活に埋め込まれた「アジェンダ」について一度立ち止まり、再検討する経験ができたと思われる。そして、これは官製的な「多文化共生」に囚われず、柔軟性と創造性、そして、批判的な視野を持ってプロジェクトに取り組むのに重要だったと思われる。活動参加者は、概ね満足しており、感想からはそれらの目標・目的を達成できたと思われる記述がみられた。

S1-13(13).初級日本語教科書の語彙における促音—アクセント型および語中位置に関する予備的な分析—

守本真帆（上智大学／日本学術振興会）・山下順子（成蹊大学）・新垣美樹（ミドルベリー大学日本校）

本研究では、日本語学習における音声インプットの役割を検討するための予備的な分析として『とびら』『なかま』『げんき』の3つの初級日本語教科書の語彙における促音の出現頻度を、アクセント型と語中位置に着目して分析した。促音の全体的な出現頻度はHL型よりもLH型の方が高く、先行研究において示唆された学習者の知覚バイアスにもとづく予想に反する結果となった。一方で、語中位置を考慮すると、語末から2モーラ目ではHL型の方が頻度が高い傾向がみられた。そのため、初級レベルにおいて語末の位置でHL型の促音が知覚されやすくなるような音声インプットがある可能性が示唆された。

S1-14(14).スリランカにルーツを持つ外国人児童・生徒に対する日本語教育支援 —千葉県山武市での調査から見えてきた課題—

佐藤明子・本城美和子・羽鳥美有紀・高柳真理・萩原幸司（城西国際大学）

本研究は、千葉県山武市のスリランカにルーツを持つ児童・生徒のための日本語支援の実態と課題を明らかにし、今後の日本語支援の方策や、教育施策などを提言することを目的としたものである。その第一歩として、実際に現場で外国人児童・生徒をサポートしている支援員に対して半構造化インタビューを実施し、問題点や困難点を明らかにした。内容分析を行った結果、日本語能力の問題だけでなく、学力や学習への取り組み姿勢、保護者が持つ時間の概念や日本の学校で期待する規則やマナーを保護者がうまく理解できていないこと等が浮き彫りとなった。今後、外国人児童・生徒へのよりよい支援につながるよう、家庭、学校、自治体が共通の認識のもと指導できるよう、連携を深めていくことが大切であると考えている。

S1-15(15).第二言語における LLM-GAI の産出促進効果

王睿琪（東京外国語大学）

本研究では、第二言語の産出に焦点を当て、大規模言語モデルに基づく生成型 AI（LLM-GAI/Large Language Model Generative）を用いた音声会話システムの開発を行った。この LLM-GAI との「対話」を通じ、学習者は目標言語の産出を行い、同時に情報を「検索」「収集」する能力を向上させることができると考えられる。研究対象は JFL 学習者であり、LLM-GAI を使用し、プレゼンテーション授業を実施した。本研究の目的は、LLM-GAI を産出促進効果が有するかどうか検証する。学習者の発話データから目標言語の「発話量」を計測し、プレゼンテーションはルーブリックにより評価された。

S1-16(16).弱い紐帶的観点から考える地域日本語活動 —共生のためのウェルフェアからウェルビーイングまで—

横山りえこ（早稲田大学大学院生）

共生のためのウェルフェアを重視した対話型オンライン日本語活動の実践を通し、本活動が参加者間の関係性ならびに個人のウェルビーイングにどう影響したのか3名のインタビューから考察する。結果、参加者間において緩やかなつながり、つまり弱い紐帯関係が生じたことがわかった。そしてそのような広範囲の多様な人びとから得られる気づきや学びは多く、楽しさを伴うことで参加者に充足感を与える様子が窺えた。また、本活動により参加者自身の情意的行動的な変容をもたらす可能性が示唆されたことから、今後こうした日本語活動が共生・共創に関わる周囲への波及効果を生み、個人のウェルビーイング実現への一歩としてもなり得ると期待できる。

S1-17(17).日本語教師の管理運営業務リストの検討と拡充

古川嘉子（帝京大学）・中川健司（横浜国立大学）・平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）・浦由実（元アン・ランゲージ・スクール）

日本語教師にとっての管理運営業務は、教育を運営する上で不可欠であるが、系統立てて学ぶ場や情報共有・議論の場があるとは言えず、実際の同業務の状況を日本語教師に対して幅広く調査する必要がある。筆者らは管理運営業務に触れた研究を分析・検討し、中川他（2020）の29分類に加えて、江夏（2021）から、事務業務や「対外業務」に就職、公的試験、学生募集、留学生向け入試、教育実習受け入れ関連を加え、「評価・教師研修・FD」に教育方法・教材の研究・開発、新任教師・現職教師の研修（研究・研修）を取り入れた。御館（2021）からは「教師・ボランティア管理」にボランティアの調整・連絡を加え、業務分類を統合して管理運営業務リストを拡充した。

S1-18(18).映像教材「スアン日本へ行く！」を用いた反転授業の試み

石山友之（国際交流基金日本語国際センター）

本研究ではノンネイティブ日本語教師のための教師研修の中で行った「映像視聴プラス」という授業について報告する。この授業は前年度の研修より実施されているが、今回は反転授業の形式を取り入れ、映像教材「ひきだすにほんご」内の「スアン日本へ行く！」コーナーの視聴を事前課題とし、授業では再話や話しあいの活動の時間を長く取った。反転授業を取り入れ、映像の視聴を事前課題としたことで、参加者は自分のペースで映像を視聴して理解を深め、自信を持って授業に参加することができた。また、その結果、普段発話が少ない参加者であっても自信を持って授業内でのやりとりに参加でき、発話が増加するという効果が見られた。

S1-19(19).「再誘い」に対する「断り」表現 —日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—

楊雪（広島大学大学院生）

本研究では、再誘いに対する「断り」表現に焦点を当て、ロールプレイを用いて調査を行い、日本語母語話者と中国人日本語学習の使用傾向を比較した。その結果、両立ともに【理由】と【ためらい】が多く使用されていることが明らかになった。しかし、日本語母語話者は【代案】を使用しているのに対して、中国人日本語学習者は【謝罪】を使用している傾向がある。本研究の結果をふまえると、日本語学習者に対しては、2回目以降の「断り」に関して、例えば【代案】のように【謝罪】以外の人間関係を構築する表現について指導し、日本語の「断り」に対する理解を促進していく必要があると考えられる。

S1-20(20).第三者ほめ談話における中国人日本語学習者の受け手としての言語行動

張晨（広島大学大学院生）

本研究では、日本語母語話者による第三者ほめ談話において、中国人日本語学習者が受け手としてどのような言語行動を使用するのかについて分析した。その結果、中国人日本語学習者は特にあいづちを最も多く使用する傾向が見られた。また、能動型の言語行動の中で、意見・評価や情報伝達を頻繁に展開する傾向が確認された。このことから、中国人日本語学習者は日本語母語話者の発話の進行を促したり、積極的に談話を展開させようとする姿勢が窺える。さらに、友人関係にのみ意見の対立が見られることをふまえると、中国人日本語学習者は日本語母語話者との親しさを示す手段として対立的な意見を述べる可能性が示唆される。

S1-21(21).VR を活用した日本観光体験教材の開発

鈴木美穂（中台科技大学）

本研究では、台湾の高等教育における日本語学習者を対象に、異文化理解を促し、日本語学習の動機付けを深めるために VR を活用した観光体験教材を開発した。教材は HTC 社の「Vive paper」を用いて作成した。VR 教材「鈴木先生との東京観光」では、渋谷、上野、浅草などの観光地を撮影し、360 度の映像や写真を教材にした。本学で日本語を非専攻で学ぶ学生 44 名に教材を体験してもらった。教材を使用した後、質問紙調査を行った。結果、学習者は VR 教材を高く評価していた。また、日本への訪日動機が生まれたこと、日本語学習意欲が向上したこと、そして、日本文化に対する学びがあったことが明らかになった。

S1-22(22).SNS で用いられる配慮表現に関する日中比較—依頼場面を中心に—

趙心怡(横浜国立大学大学院生)

依頼とは、相手に何かを依頼するときに使われる言語表現である。SNS (Social Networking Service) の普及とともに、中国人日本語学習者と日本語母語話者がチャット機能を中心とするアプリで依頼する場面も増加した。また、対面の会話と異なり、LINE での会話は表情や声の調子をうまく伝えられない非対面の会話となる。よって、本研究は日中接触場面における対人配慮の観点から中国人の日本語学習者と日本語母語話者の LIN 会話データを用いて、このような状況下で円滑な対人関係を維持するために、日中 SNS で依頼する際に使用された配慮表現はどのような特徴があるかについて考察する。

S1-23(23).外国人介護技能実習生の日本語学習 —就労施設外での継続的な学習に着目して—

山元庸子（元九州大学大学院生）

本研究の目的は、外国人介護技能実習生の就労施設外での日本語学習の現状を明らかにし、継続的な日本語学習支援の方法を検討することである。スリランカ出身の介護技能実習生 5 名を調査対象者として、半構造化インタビューを行った。インタビューは 2 回行い、「一般日本語の自律学習の難しさ」「協働学習と個別学習の役割」「学習の中断」という日本語学習状況を明らかにした。継続的な日本語学習支援は、外国人介護技能実習生のキャリアにとって重要なことであると考え。協働学習や個別学習の学習方法をはじめ、学習資源を継続的に活用するために、周囲の理解や就労施設外での日本語学習の仕組み作りが必要であると考え。

S1-24(24).学期中のシラバス変更に対する学生のコース評価 —大学における中上級会話クラスの実践報告—

荒井美帆（国際教養大学）

一般的に大学では、学期開始前にコース・デザインが行われ、開講授業のシラバスを公開する。そして、学生らはそのシラバスを参考に履修登録するのが基本的な流れである。しかし、実際の教育現場では、様々な理由により公開したシラバスに変更を加えるケースが多々ある。その変更が学生のために行ったものであり、最終的なコース評価がよかったとしても、コースの良し悪しを問う一般的な評価項目では、変更を加えたことに対する学生の本音が見えにくい。そこで本稿では、学期半ばでシラバスを大きく変更した実践例と変更に対する学生の評価をまとめ、学期中にシラバスに変更を加える際の留意点について検討する。

S1-25(25).JFL 中国人日本語学習者による多義動詞「とる」の習得

熊子涵（東北大学大学院生）・菅谷奈津恵（東北大学）

本研究は、中国語を母語とする JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境の日本語上級学習者 54 名を対象に、多義動詞「とる」の多様な語義の習得状況を調査した。「とる」の名詞+動詞コロケーションを含めた文の適切性を判断させる課題を実施した結果、JFL 学習者の「とる」の語義の習得は、第一段階（語義 6

(生産)、語義2(獲得)、語義4(甘受)、語義1(把握)、語義5(選択)、第二段階(語義3(離脱)、語義7(測定))、第三段階(語義8(占有)、語義9(動作))に分けられることがわかった。また、中国語が母語の上級者であるが、JSLかJFLかという学習環境によって「とる」の語義の遭遇頻度に違いが生じ、難易度に影響したことが推測される。

S1-26(26).大学の日本語教育実習における教育実習生へのフィードバック ルーブリック作成の試みー
大西由美(東北大学)・岸野彩花(東北大学大学院生)

本研究では、大学での日本語教育実習における教壇授業観察のFBに使用するルーブリックを作成し、観察時にルーブリックに加筆したコメント334件を調査者2名がKJ法で3つに分類した。

Iのルーブリック観点の補足は、教育実習生への肯定的なFBなど、意欲を高める目的の補足が34件あった。一方、改善への具体例や明示的なFBも91件あった。個別の指摘でより改善への効果が高まると考えられる。IIの授業前の準備に関わる内容は132件で、実習生が教案へのFBを十分に反映できなかった可能性がある。

IIIのI、II以外のものは77件あり、下位分類の結果、①雰囲気づくり②発話へのFB③経験・知識・アイディアの引き出し④想定外への対応という4つの追加すべき観点が明らかになった。今後、ルーブリック改訂版を作成したい。

【午後の部】

●口頭発表(2件)

S2-01(27).ことばと人物像の結びつきを想定した終助詞、モダリティの授業実践 ー最終課題としての動画作成課題の成果ー

西澤萌希(中部学院大学)

日本語のあらゆる言葉は特定の人物像と結びつく。この結びつきを日本語教育に取り入れることには、学習者がコミュニケーションの日本語を身につけることにおいて、一定の意義がある。そこで、終助詞とモダリティに関する授業を、ことばと人物像の結びつきを想定して行った。また、その中で動画作成課題を課した。本稿では、学習者が作成した課題や課題の前後の学習者の感想をもとに、その実践について報告する。実践の結果、学習者は動画作成課題を通して、授業で扱った終助詞やモダリティと人物像の結びつきに関する理解を整理していた。また、他の語彙要素も人物像と結びつくことや、現実の言葉づかいにも応用できることに気付いていた。

S2-02(28).レポート作成のための情報取捨選択方法の指導

根本愛子・トンプソン美恵子・ボイクマン総子(東京大学)

本稿は、レポート作成のための情報取捨選択方法の指導の実践報告である。レポート作成の経験が少ない初年次の大学学部生である日本語学習者の場合、日本語による情報収集は大きな負担となっている。しかし、これまでの教材は情報検索の必要性、文献ごとの用途の違い、検索手順、信頼できる情報源のWebサイトの紹介までであった。本実践では、前述の情報検索の基本的な内容に加え、検索結果からの情報取捨選択のタイミングと判断基準を具体的に提示した。これにより、学生が効率的に適切な情報を収集し、レポートに利用できるようになると思う。

●ポスターセッション2(上記を含む22件)

S2-03(29).オンデマンド教材を併用したブレンド型初級文法授業

高橋亘(神田外語大学)・工藤嘉名子(東京外国語大学)

本稿では、短期留学生対象の対面授業に非同期型のオンデマンド教材を併用したブレンド型初級文法授業について報告する。また、オンデマンド教材の導入により、従来の対面授業からどのように授業設計が変化したかについて SAMR モデルを援用して考察した。その結果、オンデマンド教材の活用が授業の再設計を可能にした（「変形（M）」）ほか、対面授業での文型練習やタスクなど新たな活動の機会が増えた（「再定義（R）」）ことが確認された。さらに、事後アンケートから、多くの履修生にとってオンデマンド版は自身の日本語学習に有用であること、オンデマンド版を用いた学習はさほど負担感がないことも確認された。

S2-04(30).ARCS モデルを活かした地域日本語ボランティア研修のアクション・リサーチ

古田梨乃（新潟大学）・今城淳（山梨学院大学）

筆者は、地域日本語ボランティア向けの研修の講師を担当した。これは、ARCS モデルの理論に基づき学習意欲を向上させられる日本語教育を行えるようになることで、やりがいを感じられるようになることが目的であった。研修では、自らの普段の実践における工夫について共有する時間を設けたが、ボランティア初心者／未経験の参加者が半数以上を占めていたこと、ベテランが謙遜をしてしまったことから、ディスカッションが意図したものにならなかった。そこで、次回については、初心者でもベテランでも話しやすく議論が発展することを期待し、できていないことを振り返ったり、具体例を用いて想像しやすくしたりするなど、誰もが満足できる研修を計画した。

S2-05(31).中国語を母語とする日本語学習者のストーリーテリングにおける トピック名詞句の使用実態—I-JAS を用いた分析—

王白鷺（城西国際大学大学院生）・鈴木一徳（城西国際大学）

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者のストーリーテリングにおけるトピック名詞句の使用実態について I-JAS を用いた調査を行なった。日本語母語話者 17 名と中国語を母語とする日本語学習者 31 名を対象とし、指示対象となるトピックが新規である場合、既知である場合、継続である場合の名詞句の形式を調べ、参加者ごとに物語の展開方式をパターン化した。その結果、母語話者は物語を描写する際に、トピック名詞句を省略してゼロ照応を多く使用することが分かった。また、学習者はトピック名詞句を展開する際に、どのような指示対象にも「は」を過剰使用することと、トピック名詞句に代名詞を使用する傾向があることが示された。

S2-06(32).日本語の終助詞の様相 —芥川賞受賞小説を用いた計量的研究—

顔語瞳（城西国際大学大学院生）・鈴木一徳（城西国際大学）

本研究では、2010 年から 2022 年にかけて芥川賞を受賞した小説の中における登場人物の発話に使用した終助詞を分析することによって、小説における終助詞の使用実態を通時的に検証することである。曹(2005)の発展研究として、2010 年から 2022 年にかけて芥川賞を受賞した小説の中から任意に 10 作品を選んで調査した。その結果、曹(2005)の研究と部分的に異なる結果が得られ、この差異は過去 10 年間の言語の変化を反映している可能性があると考えられる。本研究の結果から考えられる日本語教育の示唆は、日本語学習者（特に上級以上の学習者）が、より実用的な日本語の表現能力や理解能力を身につけるための教材開発のヒントとなり得る可能性があることである。

S2-07(33).同形詞から就職と就業の違い：中日対訳コーパスの調査について

王凌志（広州工商学院学部生）

本研究では、中国語と日本語の対訳コーパスを分析し、2 組の日中同形詞「就業／就職」とその意味の違いについて検討した。量的および質的分析を組み合わせた手法を用い、中日対訳コーパス（第一版）の関連

する事例を詳細に調査した。その結果、中国語の「就業」は「就業」の真部分集合であり、「就職」や「就業」の意味も含んでいる。日本語の「就職」は、「就業」と「就職」だけでなく、名詞としての「職業」や動詞としての「工作」にも翻訳される。これらの同形詞の意味範囲を比較することで、この研究は日中同形詞の研究に新たな視点を提供する。

S2-08(34).日本語教育概論における知識の構築と態度の涵養

衣川隆生(日本女子大学)・櫻井省吾(名古屋外国語大学)・西坂祥平(お茶の水女子大学)・近藤行人(名古屋外国語大学)

本稿では大学1年次の学生を対象とした「日本語教育概論」において、「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)改定版」で示されている「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」のうち、「社会・文化・地域」区分の知識、態度がどのように構築、涵養されているかを、「振り返り」を分析することによって検討した。振り返りの分析から「知識」は個人作業によっても、授業内の対話、授業後の省察を通して構築されることが示された。一方「態度」は授業内での多声的な対話や振り返りの際の省察だけではなく、日本語学習者の立場や視点で事象を考えたり感じたりすることを通して涵養されることが示唆された。

S2-09(35).正課外多文化間交流活動における学生スタッフの意識—岡山大学にほんごカフェを事例として— 長野真澄・守谷智美(岡山大学)

本発表では、正課外で国際学生と国内学生が日本語を共通言語として交流する活動の一例を取り上げ、その活動実態を記述するとともに、活動を運営する学生スタッフの意識について検討した。その結果、学生スタッフは、参加者と対等な立場で交流を楽しみながら、必要に応じてピアサポーターとしての役割を果たしており、交流の楽しさとピアサポーターとしてのやりがい活動の原動力であることが明らかになった。また、学生スタッフの支援的な態度が参加者に波及することでピアサポートの輪が広がる可能性が示された。さらに、スタッフとしての活動が異文化に対する知識や態度を養うとともに、ソーシャルスキルの向上をもたらすことが示唆された。

S2-10(36).IT企業の外国人社員に対する日本語研修の実践報告—聞き取り調査をもとにした個別の目標設定とCan-doリスト作成—

阿部祐子・町田絵美・荒井美帆(国際教養大学)

首都圏のIT企業A社では2016年より、IT関連知識の豊富なベトナム人社員を積極的に採用している。入社時の日本語レベルは全員N2以上だが、入社後5年間は会社が日本語研修を提供し、BJTビジネス日本語能力テストで2回連続してJ1以上を取得するまで続けられる。筆者らは、2023年4月よりベトナム人社員4名の日本語研修を依頼され、毎週1回の個別研修をZOOMで行っている。研修中、本人の希望や上司らへの聞き取り調査等をもとに、試験対策の授業から、業務や生活関連の日本語習得へと目標を修正した。また、各受講者の到達目標を設定し、研修の成果を示す指標としてCan-doリストを作成した。修正に至るまでの経緯や実践方法について報告する。

S2-11(37).メール文における連用中止形の使用状況

金蘭美(横浜国立大学)・金庭久美子(目白大学)

本研究の目的はメール文における連用中止形の使用状況を明らかにすることである。日本語母語話者31名と初中級レベルの日本語学習者34名を対象に16のタスクを用いたメール文データ1040件を収集し、連用中止形の使用状況を調べた。その結果、日本語母語話者は183件であったが、日本語学習者は10件であま

り使用しないことがわかった。日本語母語話者が連用中止形を使用するのは、目上に宛てた場合で、事情を説明するタスクであった。特に、欠席やイベントの申込のキャンセルなど、理由を説明する箇所が多くみられた。以上のことから、メール文を指導する際タスクの内容によって必要があれば連用中止形の使用を促すとよいのではないかと考える。

S2-12(38).日本語オンライン授業における実践共同体学習観の応用 —学習者のオンライン授業に関する意識調査から—

平生結月（名古屋大学大学院生）

本稿では、リアルタイム型日本語オンライン授業において学習者間の交流が減少する問題の改善を目的に、実践共同体の学習観の応用を試みた。特に、学習促進と動機づけの維持のために重要なコース開始時に着目し、日本語オンライン授業における実践共同体初期段階に必要な要因を明らかにするため、質問紙調査を行った。因子分析の結果、必要な要因が「コミュニティの価値の理解と帰属意識」、「メンバー間交流・協働」、「メンバーとしての積極性」であることを明らかにした。これらの要因と学習者が自由に活用できる交流機会、学習達成度および授業満足度との関連を明らかにすることで、効果的な日本語オンライン授業のデザインに繋がることを期待できる。

S2-13(39).元日本語教師が日本語教師キャリアを継続しない選択をするまでの過程

片野洋平（長岡技術科学大学）・佐藤綾（福井大学）

本研究の目的は、元日本語教師が日本語教師としてのキャリアを継続しないことを選択するまでの過程や、そこに影響を与えていた要因などを明らかにすることである。3名の元日本語教師にインタビュー調査を行い、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて分析した結果、非常勤職掛け持ちなど不安定な身分に身を置く中で転職のきっかけとなる出来事があり、日本語教師を辞めて他の仕事に就くという共通した径路が見られた。そこに影響を与えていた要因としては、収入面での不安や危機感などに加えて、非常勤講師の身分の不安定さ、専任のポストの少なさ、社会情勢の影響の受けやすさといった日本語教師という職業の特性を反映するものが見られた。

S2-14(40).シンガポールでの国際交流を通じた学習者の内的変化 —自己肯定感・自己効力感を中心に—

藤田仁子（シンガポールグローバルデュケーション—ニューヨーク州立大学バッファロー校）

現在、シンガポールの高等教育において、コミュニケーション、コラボレーション、グローバルな異文化対応能力といった21世紀スキルが教育目標として提唱され、Growth Mindset(成長を促進する思考)、Self-reflection(自己の振り返り)、Self-efficacy(自己効力感)といったマインドセットの成長を促すことも重要な課題とされている。

本稿では、筆者が担当した日本語入門クラスでの、日本人大学生との交流を通じて、学習者視点から見た体験の意味と意義、内的変化や成長を、彼らが書いたリフレクション・ジャーナルの記述をもとに省察する。

言語教育は、単に言語能力をあげるだけではなく、自己肯定感、自己効力感、他者への理解と興味関心が高まる工夫が必要であると思われる。

S2-15(41).タイ中等日本語教師を対象とするコンピテンシー・ベースの授業の試み —日本語運用能力向上と新たな教授法体験を目的とするテーマ学習の実践—

今井寿枝・武田素子（国際交流基金関西国際センター）

本稿ではコンピテンシー育成を担う教師養成のため、タイの中等日本語教師を対象とする訪日研修で実施したコンピテンシー・ベースの日本語授業の実践について報告する。授業は①日本語運用能力とコンピテンシーの向上、②コンピテンシー・ベース・ラーニング（以下、CBL）への理解促進を目的としてSDGsのテーマ学習を実施した。その結果、目的①については相手に配慮して話す、因果関係等を整理する力が強化された。目的②については、思考能力と自己学習能力について、類似の活動を繰り返して体験することにより、その力や育成方法について具体的なイメージが持てるようになっていく様子が窺えた。一方、CBLによる学習が初めてであることに起因する負担からテーマ設定は検討の余地があることがわかった。

S2-16(42).「やさしい日本語」の理念に基づく日本語表現の授業 ―多文化共生を目指した日本語力について考える―

志賀玲子（明海大学）

本研究は日本語教育の知見を、広く一般の大学生に活用するべく行った授業実践の報告である。多文化共生社会の担い手として「やさしい日本語」の理念や手法を身につけた上で、相手や場面に合わせた表現の大切さを学び、硬い表現にも柔軟に対応ができるような意識づけ及び練習を行った。授業ではグループワーク等を行い、実践を重ねた。結果、大学生たちは多様な背景の人々に対してわかりやすさを意識したプレゼンテーションを行った。語彙の選択や発話の仕方に変化が現れた。一方でアカデミックな硬い表現にも対応ができることが記述から明らかになった。相手や場面に合わせた柔軟な言語活動を意識することは多文化共生社会に生きるうえで欠かせない力であろう。

S2-17(43).オンライン日中交流会における中国人学生と日本人学生の調整行動

中井陽子（東京外国語大学）・丁一然（東京外国語大学大学院生）・張曉雪（東京外国語大学大学院生）・劉夢龍（東京外国語大学大学院生）

オンライン日中交流会での中国人学生3名と日本人学生2名の5者会話における調整行動を分析した。その結果、日本人学生が会話教材をもとに話そうと事前調整した場合は、中国人学生が理解しやすい様子が見られた。また、日本語が通じない場合に文字を見せたり、易しい語彙・文型に言い換えたりする他、沈黙が起きた際に呼びかけたり、次話者やネット接続を確認したりする等の事前・事中・事後調整が見られた。さらに、中国人学生間と日本人学生間でそれぞれチームになって協力しながら話者交替や意思疎通等の問題を事前・事中・事後調整して解決していた。こうした調整行動を行う機会を多く設けてより強化することで、全員が会話に参加しやすくなることを指摘した。

S2-18(44).国内の日本語学校に勤務する非母語話者日本語教師の自己認識

高橋雅子（尚美学園大学）

2024年から日本語教師は国家資格となる。受験資格として国籍・母語は不問とされていることから、今後日本語教師の国家資格を目指す日本語非母語話者が増えることが予想される。その一方で、現在国内で働く非母語話者日本語教師（以下NNT）の人数や実態について公的な調査はされていない。本研究では国内の日本語学校におけるNNTの在籍の有無、およびNNTの意識調査を行った。その結果、NNTが在籍する日本語学校の割合は5.0%であり、国内の日本語学校では母語話者日本語教師が多数派を占めていることが示された。また、NNTの意識として、自身の日本語学習者としての経験が教授方法、学習心理の理解、学習者の興味・関心の理解につながり、授業実践に活かされていることがわかった。

S2-19(45).日本語学校における新任教員指導のための管理運営業務のリスト作成と運用の試み

安中浩美(アン・ランゲージ・スクール成増校)

筆者は大学の副専攻で日本語教員養成課程を修了し、一般企業で5年半勤務した後、日本語教師となった。日本語学校の日本語教員といえば、外国人への日本語授業の担当が仕事だと考えていたが、実際の現場では、日本語を教える以外にも多数の管理運営業務があり、それらに対応する力が求められ、非常に戸惑った。しかしながら、養成課程ではそれらを学ぶ機会が無く、また、現在の勤務校では前職のように業務習得のリソースが整っているわけでもなかった。この点に問題意識を持ち、本研究では、新任の日本語教師が日本語学校における教える以外の仕事を体系的に習得するために、先行研究を基に管理運営業務をまとめたリストを作成、運用した結果を報告する。

S2-20(46).ピア・レスポンスによる日本語学習者の意識の変化

中林律子（愛知淑徳大学）

本稿では上級日本語学習者の作文授業において、お互いの作文を読みコメントをし合う活動（以下「PR」）を通して、学習者の作文に対する意識にどのような変化が生じたのかを報告する。学習者が他者の作文に対して行ったコメント、及びPRの振り返りの記述を分析した結果、PRによって学習者が作文において着目する点が増える可能性が示唆された。さらに、PRの振り返りの記述には読みやすさへの配慮や魅力的な文章を書きたいという意欲が窺えるコメントが見られた。以上のことから、PRは作文の着目点を広げ、読み手に対する意識を高めるために有効な手段であると考えられる。

S2-21(47).正統的周辺参加理論から捉える外国人児童生徒の日本語学習ビリーフ —日本社会への参加プロセスから—

江学榎（城西国際大学大学院生）

この研究では、外国人児童生徒を対象とする日本語教育の方法を見直すために、日本語学習に対するビリーフを明らかにする必要性を提示し、Barcelos（2003）によって提示された第二言語学習者のビリーフを捉える3つの視座をあげ、文脈的アプローチの視座から捉えるビリーフに関する研究がまだ少ない現状を述べた。そして、この視座の特徴と関連する正統的周辺参加理論をあげ、外国人児童生徒の日本語学習ビリーフを各参加段階で捉えた結果、主に学習方法の面と学習態度の面から見られたことがわかった。最後に、ビリーフに影響する要因を探る研究が期待されるという今後の課題を提示した。

S2-22(48).外国人介護人材の多様化を踏まえた介護用語多言語ウェブ辞書の開発

中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・布尾勝一郎（立命館アジア太平洋大学）・奥村匡子（神奈川大学）・黄海洪（京都大学大学院生）

受け入れの枠組みの拡大に伴い介護人材の多様化、多国籍化が進んでいる。受け入れの枠組みには、介護福祉士国家試験受験が必須のものとしてないものがあるが、受験が必須ではない介護人材についても、現場のニーズや本人のキャリア形成のため、将来的に一定数が国家試験を受験する可能性が高い。それは、介護の日本語教材の多言語化のニーズが高まっていることも意味する。このような現状を受けて、筆者の研究グループでは、介護用語の訳語として、英語、インドネシア語、中国語、ネパール語の4言語（将来的には、ベトナム語、ミャンマー語を加えた6言語）に対応した介護用語多言語ウェブ辞書を新たに開発した。

●ポスターセッション3（22件）

S3-01(49).破裂音の有声無声に関する学習者の認識 —韓国語話者と中国語話者の場合—

北村よう（東海大学）

本発表は、韓国語話者と中国語話者が日本語の有声無声音をどのように認識しているかを紹介するものである。韓国語の平音は語頭では無声音、語中では有声音で発音されるが、韓国語話者をそのどちらも日本

語の有声音であると認識している。また、中国語話者は、無気音で発音されることが多い日本語の語中の無声音を有声音と認識している。促音の後の破裂音も、氣息がないため有声音と認識される。韓国語の濃音は、韓国語話者は日本語の無声音に対応していると捉えているが、中国語話者はそれを有声音と捉える。教師はこのような認識のズレを意識する必要がある。

S3-02(50).相手の認識を修正する際の日本語学習者のノダについて —理解面と産出面の比較—

范一楠（横浜国立大学）

本研究は、日本語母語話者がノダを使用しない場面についての学習者の理解を、選択肢問題によって測定した。また、ロールプレイを加えることによって、学習者の理解面と産出面の一致性を調査した。

具体的には、「相手の認識を維持する」「相手の認識を修正する」「相手の疑問詞疑問文に答える」の3つの場面において調査を行った。日本語習熟度（ACTFL-OPIの中級と上級）と、学習環境（日本在住経験無しと日本在住2年以上）による違いについて検討した。

その結果、中級段階の学習者に対してノダを使用しない場面を理解させること、目標言語圏に近い環境を作ることの有用性を示唆した。

S3-03(51).「の」の過剰使用の起こりやすさ —I-JAS を用いた品詞別・母語別分析—

鈴木一徳（城西国際大学）

本研究は、多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）を用いて、日本語学習者が犯す「の」の過剰使用の誤りを、品詞別・母語別に分析するものである。「の」の過剰使用の誤りは広く観察されているが、イ形容詞修飾、ナ形容詞修飾、動詞修飾の3つの観点から分析することで、「の」の過剰使用が起こりやすい環境を見極めることを目的とする。調査の結果、母語に関係なくイ形容詞修飾構造において「の」の過剰使用の誤りが多いこと、その中でも特に中国語話者と英語話者についてはイ形容詞修飾構造において「の」の過剰使用の誤りが多いことが分かった。一方、韓国語話者については、「の」の過剰使用の誤りは頻出しないことが分かった。

S3-04(52).ラジオドラマ作成を用いたオンライン短期国際共修の試み —協働学習の深化を目指して—

廣川智・古田梨乃（新潟大学）

本稿は、海外から参加の大学生と日本人大学生をオンラインでつなぎ、共修で行った短期プログラムについて報告するものである。本プログラムは、個人作業を減らし、学習者間の協働性を高めること、異文化間能力や問題解決能力を向上させることを目的として、ラジオドラマを作成することを課題とした。グループワークを録画したビデオの観察を行ったところ、学習者が互いに補完しあいながら困難を乗り越え、課題を達成し、長時間にわたって協働する様子が観察されたことから、ラジオドラマ作成という課題はオンライン国際共修において協働学習を深めることに一定の効果があることが示唆された。

S3-05(53).中級日本語オンデマンド教材「ここから」の開発—Moodle 環境で学習意欲を高めるための工夫—

工藤嘉名子・木下瑞紀（東京外国語大学）

本稿では、現在開発中である中級レベルのオンデマンド教材「ここから」の概要を紹介し、ARCS モデルを応用した Moodle 環境における学習意欲向上のための工夫について報告する。「ここから」は、初級レベルを修了した学習者が身近なテーマの学習を通じ、中級前半レベルの日本語運用力を身につけることを目指した教材である。教材は、全8ユニットから成り、各ユニットには ARCS モデルを応用した多様な学習コンテンツがある。例として、ARCS モデルの「注意 Attention」「関連性 Relevance」に焦点を当てた学習ナビ動画の他、聴解コンテンツにおける「自信 Confidence」「満足感 Satisfaction」に関する工夫について報告する。

S3-06(54).介護専門用語の翻訳をめぐる諸問題 —介護の日本語教育における留意点について考える—

黄海洪（京都大学大学院生）

本論文は、日本語教師の立場から、介護専門用語の翻訳に関わる問題点について考察を試みた。介護分野の専門用語の翻訳は言葉の単純な置き換えを超え、異文化間コミュニケーションの一環として捉えられるべきであると指摘した。特に、日中翻訳においては、両言語の間に存在する文法構造や表現方法の相違に起因する特有の困難があることを指摘した。介護の日本語教育には、単に言語の仲介としての役割を超え、異文化間の橋渡しとしてより積極的な役割を果たす必要がある。本論文では、日本語教師が自ら専門用語の翻訳に取り組むことで得られる深い理解と洞察の重要性を認識し、機械翻訳が普及する現代において、介護の日本語教育に対する提言を行った。

S3-07(55).WEB版小学校教科書語彙リストの公開 —学習支援での活用に向けて—

山本裕子（愛知淑徳大学）・川村よし子（元東京国際大学）・鷲見幸美（名古屋大学）

発表者等は、外国人児童のための日本語支援環境を提供することを目指し、小学校教科書で用いられている語彙の調査を進め、語彙の基礎的資料として小学校教科書語彙リストを作成した。小学校教科書語彙リストは、小学校の全教科・全学年の教科書で用いられている語彙を複合語も含めて網羅的に抽出したものである。これを元に、容易に閲覧、及び多種多様な検索が可能なツールとして、WEB版教科書語彙リストを一般公開することにした。本発表では、小学校教科書語彙リストの概要、完成したWEB版教科書語彙リストの特徴及び活用法について紹介する。

S3-08(56).Auto-TEMを用いた上級日本語学習者の内省支援の試み

稲田栄一・荻田朋子（関西学院大学）

本研究は、日本語上級クラスで実施したAuto-TEMを用いた内省支援の試みの効果と、活動における課題を探ったものである。Auto-TEMを用いた目的は、対象者が自身の日本語学習過程をモデル化しながら俯瞰的に過去の経験を評価できるようになることと、クラスメートと人生経験を共有することで他者を知り、異文化・多様性の理解を促すことである。調査対象者は、日本国内の大学に在籍する上級日本語学習者8名である。この活動を経て、各学生が記述した「学習の軌跡に関する作文」を分析した結果、全員がAuto-TEMに基づく記述を行っていた。また、活動後に実施したアンケートでは、他の学生のAuto-TEMを見ることにより気づきが得られたとする学生もあり、本活動が自己および他者を理解するために有効であることが示された。

S3-09(57).原因・理由を表す「て形接続」の前件・後件の述語制約 —初級・中級日本語教科書・参考書、および先行研究より—

山本栄作（元横浜国立大学大学院生）

「原因・理由」を表す「て形」接続の前件、後件の述語制約について、教科書・参考書等にどのような記述されているかについて調査した。初級・中級教科書・参考書では、後件に意思動詞ではなく無意志動詞・形容詞が使われる旨は記述されているが、前件についての記述は認められなかった。一方、先行研究では、前件についても意志でコントロールできない表現がくること、他にも、後件が過去の感情を表す場合には前件が意志動詞でも適格文になること、前件が状態・継続性を帯びていることが「原因・理由」として認識されるための重要要素であることなどの記述が認められた。これら先行研究の内容を認識しておくことが、学習者の産出へのよりよいフィードバックにつながると考える。

S3-10(58).学習者は教室の外でどのように日本語を使っているか—教室外での試行錯誤を教室活動に取り込む試み—

シャルマ彩（東京大学）

本稿は、はたらきかけを扱った授業と連動させて、学習者に教室外での日本語使用の記録を促した取り組みの報告である。学習者には、アウトプットとともに発話時の状況や意図、聞き手の反応、内省などを記録してもらい、事後の授業でフィードバックを行った。学習者が持ち寄った多様な事例では、発話が行われた文脈で聞き手が何を知っているか、聞き手にとって必要な情報は何か、聞き手にどの程度裁量があるかを考慮するといった聞き手への配慮がスムーズなはたらきかけの成否を左右していることがうかがえた。レポートの分析と学習者へのフィードバックの過程で、日本語とは異なる言語文化を持つ学習者に文脈を利用した協同的なやり取りを教える際の示唆も得られた。

S3-11(59).やさしい日本語を使ったごみ出しに関する情報発信とガイドラインの作成の試み

永井涼子（山口大学）・岩永未有（山口大学学部生）・上田佳奈（山口大学学部生）・岡本葵（山口大学学部生）・付澤南（山口大学学部生）・三谷真依（山口大学学部生）

本研究では、在留外国人に向けた、ごみ出しの情報発信および初心者向けのやさしい日本語ガイドラインの作成に関する試みを報告する。具体的には JLPT : N4~N5 レベルの外国人が、来日直後にスムーズに日本のごみ出しに慣れることを目的に、やさしい日本語を使って、ごみ出しカード、ごみの分け方、ごみの捨て方を作成し、その理解度調査を行った。その結果、語彙・表現・文法、情報量、イラストの存在が、文の長さ、分かれ書き等よりも効果的であることがわかった。またこれらの配布物は、日本語教育を学んでいない学部生が作成したことから、初心者向けのやさしい日本語ガイドラインを作成し、誰でもやさしい日本語を使えるようになることを目指した。

S3-12(60).AI 歌教材を利用した言語学習の効果の調査 —中国人日本語専攻大学生を対象にしたアンケート調査を通じて—

劉玲伶（株式会社 ProoProo）

本研究は、AI によって作成された歌が大学生の日本語教育における効果を探求したものです。教科書の内容を統合したこれらの歌が、記憶、理解、学習への熱意といった面に与える影響に焦点を当てました。結果は、参加者の間で音楽（93%）および歌うこと（82%）の高い楽しさを示しました。特に、74%がこれらの歌をテキストの暗記に有益だと感じ、77%が語彙の保持に有効だと感じました。さらに、89%が学習意欲の向上を経験しました。これらの発見は、AI によって作られた歌が言語習得のための強力なツールであり、記憶と理解に肯定的な影響を与えることを示唆しています。しかし、将来の応用では、技術的な課題や著作権の問題に対処する必要があります。

S3-13(61).特定技能外国人の日本語習得と生活実態についての予備的調査

助川泰彦（東京国際大学）・吹原豊（福岡女子大学）・松崎真日（福岡大学）・磯野英治（名古屋商科大学）・黄美蘭（帝京平成大学）

本研究は、在留資格「特定技能」で来日する外国人がどのように日本語を習得するのかを定量的かつ定性的に観察し、日本語教育の進むべき方向性を実証的に探索しようとするものである。2018年に創設された在留資格「特定技能」により、将来的には永住権の取得も可能となった。日本は制度として「移民候補者」を受け入れ始めたのである。今後永住権を取得した移民が物心両面で豊かに暮らすには文化の壁と言語の壁を乗り越える必要がある。本研究では、JOPTにより外国人労働者の日本語力を測定すると同時に、その生活実態、特に日本人とのネットワーク作りを調査し、両者の関係を考察する。

S3-14(62).ひらがな導入教材に用いる語の選定プロセス ―ヒンディー語に基づいた連想法による教材作成に向けて―

目黒裕将（エイム奈良国際アカデミー）・井元麻美（京都外国語大学大学院生）・羽持悠希（一橋大学大学院生）

本発表では、学習者の母語に基づいたひらがなを導入する教材を作成する際に、教材として適切だと思われる語を選定するために用いたプロセスについて明らかにする。ヒンディー語に基づいた連想法を用いた絵教材を作成するために、目黒他（2023）で作成したアンケート用紙を用い、デリー及びデリー近郊の中等教育機関 10 校の 6 年生（173 名）を対象に、教材に用いる語を調査した。一部の語は 2 回予備調査を行った後、3 校（83 名）を対象にオンラインアンケートツールを用い、再調査を行った。2 度の調査の結果、ヒンディー語に基づいた連想法を用いた絵教材に使用する語を決定した。

S3-15(63).大阪弁と共通語における「発話機能を意識した音声」に共通する韻律的特徴

高村めぐみ（愛知大学）

本研究は、発話機能を意識した音声には、地域方言固有の韻律的特徴を超越した共通点があることを明らかにしたものである。

大阪弁、共通語による 10 種類の発話機能を意識した音声を資料に、韻律三要素（持続時間長、Fo、音圧）を分析した結果、話し手の感情を明確に伝える発話機能（詫び、同情、感謝、賞賛）や、聞き手の負担となる可能性がある発話機能（依頼、許可求め）は、大阪弁と共通語の間に共通する韻律要素が多いことが示唆された。

最終的には、大阪弁を母方言とする教師が会話指導をする際、一助となることを目指す。

S3-16(64).LLM-GAI を用いた初中級日本語教材の開発

孫彤（東京外国語大学大学院生）

本研究は、大規模言語モデルを用いた生成型 AI（LLM-GAI）を活用した日本語教材の開発について述べている。教材は「Nihongo Navigator」という自作 GPT を利用しており、学習者のレベルに応じたコンテンツ（本文、語彙の説明、文型の解説、ドリル練習）を生成することができる。また、OpenAI が提供する音声認識 API の Whisper と音声合成 API の TTS を利用して、ChatGPT をコアにした「GPT-Talk」という自由会話練習システムも開発している。これらによって、実践的な会話練習が可能になっている。今後の課題としては、より使いやすい操作環境を構築するためにプロンプトの複雑さを減らすこと、実際の教育現場での教材の活用方法に関する実践研究を進めることが挙げられる。

S3-17(65).日本語教育実習における教師教育者の介入 ―教師教育者は何をすべきか―

河野俊之（横浜国立大学）

筆者は今年度、学部生の日本語教育実習を指導した。学生たちは技能実習生を対象に対面で日本語授業を行った。学生は最大で 7 回実習を行ったが、教科書のダイアログ及びキューをそのまま使用することで、会話練習というよりもほぼシナリオドラマか小会話ドリルになっているなど、学生の「自己教育力」が向上していない部分があった。これらの結果から、実習期間の途中で対面により実習生自身で解決方法や他の方法を考える活動を取り入れたり、日本語教育実習の動機づけを高める活動もさらに取り入れたりする必要があることが示唆された。

S3-18(66).初級日本語学習における CM 活用の試み—学習内容に紐づいた活動を通して—

松尾恵理沙（東京国際大学）

初級日本語学習において学生から多く聞かれるニーズとして「日本文化を知りたい」と「自然なコミュニケーションが取れるようになりたい」があり、このニーズに沿うものとして映像作品の活用注目した。映像作品の中でも CM は短い作品であるため、限られた授業時間に取り入れやすい。そのため、初級日本語の学習内容に紐づいた CM 制作の活動を実施することとした。活動を通して、学生は授業で学んだことをどのように CM に組み込むかについて深く創造的に考えることとなった。また、友人とのコミュニケーションの楽しさや日本語の上達を実感することができた。以上のことから、本活動が学生の日本語学習に対する自信につながったと考えられる。

S3-19(67).シンボリック相互作用論から捉える中国人日本語教師のビリーフ —学習者との相互作用に焦点を当てて—

周天舒（城西国際大学大学院生）

本研究は、中国における日本語教師の研修のあり方を見直すために、日本語教師のビリーフを明らかにする必要があると指摘し、日本語教師ビリーフの中の問題点として、ビリーフを分析するための理論的枠組みの欠如、学習者とのやりとりを分析することが不足しているなどの問題点を加え、シンボリック相互作用論を理論的枠組みとし、実践現場で教師と学習者のやりとりに焦点を当て、中国人日本語教師のビリーフを探った。その結果、【教材を把握する必要がある】、【学習者を理解する必要がある】、【教育成果を重視する】、【学習者の心理面を把握する必要がある】、【学習者の心理面の育成を重視する】などのビリーフを見出した。

S3-20(68).学習者が求める ICT を活用した発音学習支援ツールのあり方 —「にほんごオーバーラッピング」を事例に—

崔小雨・鎌田真凜・Dadayev Esenmyrat・Adashboev Shakhrukh Shirinboy Ugli（筑波大学大学院生）

本研究では、「にほんごオーバーラッピング」を対象にユーザビリティ調査を実施し、学習者が求める ICT を活用した発音学習支援ツールへのあり方について検討した。その結果、日本語の習熟度に関わらず、使いやすく、効果的なツールであるためには、「(1)文字による説明に頼らなくても操作できること、(2)各機能の効果的な活用方法が紹介されていること、(3)学習者目線でのデモンストレーション動画があること、(4)長文に対応していること」が必要だと明らかになった。また、教師から見た望ましい機能と学習者が求める機能に差がある可能性もあることから、学習支援ツールを紹介、作成する際には、学習者の目線からユーザビリティを確かめる必要がある。

S3-21(69).ChatGPT によるレポートへのフィードバックとその活用に関する一考察

寺嶋弘道（立命館アジア太平洋大学）

本研究は、学習者のレポートに対する ChatGPT のフィードバック、及び学習者のレポートの修正について報告するものである。まず、ChatGPT の「不自然な部分に対する修正案」には不適切なものが見られたが、学習者は自身の判断で ChatGPT のフィードバックを受け入れるかどうか選択する傾向が見られた。また、ChatGPT のフィードバックは教師のフィードバックとは質が異なり、教師がコメントしなかった部分に関しても高い評価を与えていた。一方、ChatGPT の「考えを深く問う質問」を受けてレポートを修正した学習者が 2 名いたものの、不適切な質問も多く見られ、修正を十分に促せなかった。そのため、プロンプトの内容や ChatGPT のフィードバックの活用方法について再検討が必要であることがわかった。

S3-22(70).JLEM 会誌で「ネットワーク」はどのように用いられているか —日本語教育における「人と人とのつながり」の様相を探る試み—

清水春花・佐藤蘭礼(東京国際大学)

新型コロナウイルスの影響で遠隔授業を余儀なくされた日本語教育機関が多く、人とのつながりについて注目されることが増えた。今回の調査は日本語教育においての「つながり」を探るための予備調査として、つながりの意味を含む語「ネットワーク」がどのように用いられてきたのか、過去の JLEM 会誌を対象に記述を試みた。分析データとして人や組織のつながりの意を指すものを抽出し、①構成員はだれか、②目的は何か、本文中に現れる言葉から抜き出し、検討を行った。その結果、目的を文中から抜き出せなかったものが多く、その他に支援を目的とするものがあつたことが特徴的であつた。今後はデータ数を増やし、分析・考察を深めたい。

【凡人社による出張販売】

期間中、会場で日本語教育の専門書店・出版社、株式会社凡人社による出張販売が行われる予定です。どうぞお立ち寄りください。

【会費納入のお願い】

JLEMでは4月から翌年3月までを会計年度としております。2023年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。

なお、①ご登録の会員名と異なる名義で振り込まれる場合、②振り込んだ方の名前が外国語で表記される場合には、jlem-ml#jlem-sg.org(#は@です)までe-mailにてお知らせください。②では、特に中国の方がカタカナ名で振り込んでも、ゆうちょ銀行のシステム上振り込み名がピンインで表記されることが多いため、ご登録の会員名(漢字とカタカナのみ)を検索して確認するのに時間がかかっています。ご協力をお願いします。

その他ご不明な点も、上記アドレス宛にお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140

番号：69076511

加入者名：日本語教育方法研究会

振込者名：(氏名のみ)

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：018

預金種目：普通

店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店)

口座番号：6907651

加入者名：ニホンゴキョウイクホウホウケンキョウカイ

振込者名：(氏名のみ)